ポナペ島の印象

（京都探検地理学会南洋派遣隊）

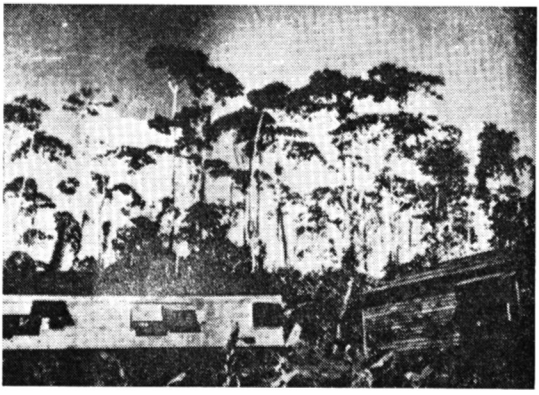
ポナペ島から帰ってきたわれわれが，会う人毎から受ける質問はまるで判でおしたように「南洋はさぞ暑かったでしょう」とか「果物がたくさん食べられたでしょう」とか「土人はどんなふうです，危いことはありませんか」とかいった式のものであった。おそらく人々の脳裏にえがかれる南洋は，熱帯特有の鬱蒼たるジャングルか，さもなければ椰子の木しげる珊瑚礁であって，そこに住む人々といえば，枝もたわわに実る果樹の木蔭に床もない草ぶきの家を建て，強烈な太陽の光を浴びて一年中裸のままで暮し，夜は夜で白砂の海岸に寄り集って焚火をかこむ奇怪な踊りと歌に熱狂し，たまたま通りかかる旅行者に対しては兇悪な眼を光らせるといった光景にちがいないのであった。いや，実の所われわれにした所で，はじめ内地でたてた計画にはこれに類する想像に基づくものがなかったとは言いきれないのである。その一例としては，もしポナペに上陸の暁には一度はどこか水平線の見わたせる景色のいい海岸に天幕でも張って根拠地とし，採集や調査の余暇には水泳や魚釣りでもやって大いに英気を養おうではないかというわけで，水泳着や「水中覗き」までちゃんと用意して行ったのである。ところがいざポナペについてあちこち廻ってみると，海岸という海岸はほとんどすべてこんもりとしたマングローブ林のとざす所となっていて，海水浴はおろか，ちょっとでも見はらしを楽しもうとすれば少し高みに上るか，部分的にマングローブのとぎれた所でも探すより外は致し方なかった。海岸沿いのいい道を歩けば，なるほど山側は見事な椰子林になっていて，ここがもしはじめの空想の世界であるならば足もとから白い砂浜が前後につらなり，そこへ太平洋のうねりの末が砕ける波頭となってどうどうとおしよせるはずなのであるが，現実のこの椰子林から続く水面にはオオバヒルギやアカバナヒルギがぎっしりと生いしげり，その重なり合った樹冠の間からもれる陽の光が無数の斑点となって，奇妙に錯綜したこれらマングローブの気根や呼吸根の上になげかけられているのである。底深い泥を蔵した無気味な水中にはもとより足のふみ入れようもなく，ここから海のはじまるということも無理に意識し

ない限り眼の方でまだ納得がゆかぬ。ましてココ椰子さえもない村境いに近い自然林の間の細径をたどれば，海岸すれすれに通っているのにかかわらずまるで山深くふみ分けている心地さえするのである。それでもし後になって沖合はるかに島をかこむ珊瑚礁に船を出してもらえる機会がなかったとしたなら，名にし負う南海の水の透明さ，色とりどりの海底動物や群なす魚の美しさなどはどこか別の遠い島の物語であって，われわれの島の生活からはまるで縁遠いものというふうに考え込んでしまったかもしれないのである。

未知の土地に対するあこがれをまじえた想像の世界と，眼で見る現実の状態とのくいちがい，今までに大なり小なりの旅行の際に体験してきたこの期待はずれにも似た感情は，海岸のみならずポナペの山を眺めた時にもまた心の片すみに何とはなしに物足りない思いとして現われてきたのである。山は島の中央部を占領し幾段かの平坦面を形づくりつつ四方に海岸近くまでその脚をのばしていた。段と段との境は急峻な崖となり割合に水量の豊富な溪流はそこで落下して見事な滝をつくっている。頂はほとんど常に雲にかくされているが山腹は青々とした樹木で蔽われ，雲の中からゆるやかに下っている尾根の上にはオトコヤシが数多く頭を抜き出している。これらは圧倒的な熱帯的景観というよりはむしろ物静かな内地的風景という方がふさわしく，親しみの感情こそおこれ，われわれの知らず識らずの間に期待していた畏怖の念のわきおこる自然だとは義理にもいえなかったのである。それでもなおわれわれは心おどる予想をもっていた。われわれはまだ森林を外から眺めただけである。その中に入りさえすれば，熱帯降雨林として記述や絵や写真を通じてわれわれに植えつけられ半ば固定してしまっている壮大でもあり陰惨ともいえる森林の景観が，きっとまのあたり展開されるであろう。それはおそらく下から上へと幾重にも樹冠が層をなして見事な立体構造をつくり上げているにちがいないし，その最上層は少なくとも30mをこえる巨木列のひろがった梢の占める所となっているであろう。林内は昼なお暗く，あまつさえ蜘蛛の巣のように樹々にまといつき，垂れ下った纏繞性植物が一歩一歩通路をふさいでいるかもしれないのである。その中に身を投ずることこそわれわれの夢の実現であるとむしろ心のはやるのさえ覚えたのであった。われわれは多分あまりにも物事を理想化して考えすぎていたのであろう。われわれの期待したような森林は，あるいは本場のニューギニアあたりに行ってもそうやすやすとはぶつかれないのかもしれぬ。しかし想像の生み出した理想郷をわが眼で確かめようとする所に，われわれを未知の土地

へと駆りたてる原動力の一つがあるものとすれば，われわれがポナペに対してあらかじめ抱いていた考えの誤りもあるいは許されてよいであろう。

ポナペの森林樹種の筆頭はトオンであった。すんなりと伸びた幹と，上空でまばらに分けた枝と，それに朴に似た大きな葉をつけたこの樹は，平地にでも伐採を免れている所にセタックやカララなどの他の樹と共に亭々と立ちならび，上方は最高峰の近くまで及んでいる。もっともセタックなどは山を登ると中途から段々少なくなり，これに対してオトコヤシが上では優勢となるのである。トオン，セタック，オトコヤシなどを第1層の樹木とすれば，それらの幹の間に木生羊歯やタコノキの類が伸びて第2層を構成する。さらに下はもう地表からわずかに出たばかりの下生えである。第1層といっても樹高はたかだか20mもある位であろうか。林の中をたどっても籔に苦められることもあまりないし，昼なお暗いという形容もちょっと使い兼ねる。まして頂上近くまで登れば大きな喬木はほとんど姿を消し，森林は下方の第2層の高さ位の，むしろ灌木林といった方が適当な位の矮林と化してしまい，ただオトコヤシだけがまばらに頭をつき出しているといった状態なのである。これがわれわれの期待していたポナペにおける降雨林の正体であった。もっともそうかといって何もわれわれがここで何から何まで失望してしまったというわけではない。中腹以上に生える樹木の幹といわず枝といわず一面に蘚苔類，羊歯類あるいは着生蘭などの蔽っている光景はこれが蘚苔林といえるかどうかは別としても確かに見ものではあったし，頂上平坦面に発達しているアカミノタコノキ群落のそれこそまるで蛸の足のようにひろがった枝や気根の間をくぐりぬける際の怪奇さなどもたしかにここでは書き記す値打があろう。頂上の少し下にきっとあるはずの岩小屋を探し出すのに飽きもせず降る雨にびしょぬれになりながら2日も無駄に歩いたことも，樹のしげり方がそ



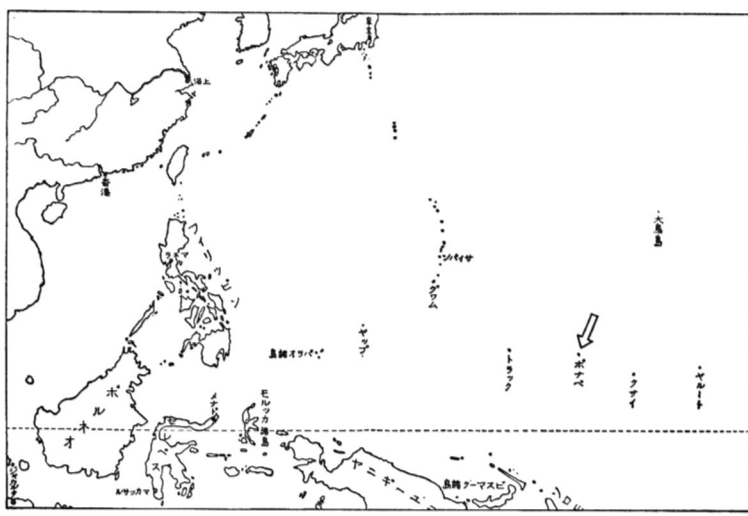
ポナペの森林

う馬鹿にしたものではないことを示すものかもしれぬ。それにしてもわれわれの頭からポナペ森林の貧弱さについての印象を消し去るにはまだまだへだたりがあった。

私は今ここでポナペの森林発達についての詳しい議論をする余裕も，またその整理された材料ももたないが，森林の貧弱なことの原因が現地でしばしば聞かされたような単に表土の浅いことによるのみではないであろうというのが，われわれの間の一致した意見であった。われわれはもっと立地条件を研究しなければならないと同時に，おそらく問題を森林構成樹種にまで発展させなければならないであろう。今のところ確かに安定した極盛相を示しているポナペの森林ではあるが，はるかな過去において巨大な現在の大陸や大島嶼の典型的熱帯降雨林の第1層をつくる樹種がトオンやセタックと共にこの地に渡来していたものとすれば，森林はもっとちがった状態に発達したかもしれぬというのは，われわれのいわれのない単なる空想にすぎないのであろうか。過去に大型哺乳類が渡来できなかったこの島では，豚や鹿が人類の手によって移されてくるまでそしてそれらが野生化するまでは，生物社会の中でのそれらの占めるべき生態的位置は空虚のまま残されていたのである。ポナペ島は他の世界から隔絶され孤立して，蛇や蛙も入り棲まず，流水性昆虫でさえほとんど見られないままで長い年月を送ってきた。しかも森林の場合と同じように，動物もまた貧弱ではあるが，安定した社会を構成し維持してきたのである。それはわれわれの間で用いた呼び方によれば「未発達の安定」といえる状態なのである。私はここでこの島の住民，カナカ族の社会についても述べてみたいのであるが，もはや紙面の余裕が残されていないから，ただ単にこの原始民族の社会もまた最近にいたるまで「未発達の安定」状態にあったといい得られるであろうことをつけ加えたい。しかし島民の生活は今や文明との接触により社会的にも経済的にも大転換を行ないつつある。それは正しく安定の破壊される時であり，新たなる発達への出発時期でもある。今までは自然の中に埋もれ，むしろ自然の一部であるかのように見られがちであった島の住民が，自然より抜け出し近代的な経済組織，社会組織の中に編成がえされた後も，自然自身はその「未発達の安定」状態を果たして悠久の将来にまで破綻を示すことなく保って行くものであろうか。

（昭和16年11月15日　森下記）

人間社会



註　原本より転写のため，地名は太平洋戦争当時の呼称のままである．